

アズマヒキガエル（ヒキガエル科ヒキガエル属）



寒天質の紐状の卵塊



（撮影：藤谷武史）



上陸した子ガエル

（撮影：寺本匡寛）

■見分け方

- 大きくてずんぐりしている。
- 短く太い四肢、大きな頭を持つ。
- 成体の体色は個体ごとにさまざまで、背中は茶褐色、黄土色、赤褐色など。
- 背中はさまざまな大きさの隆起でおおわれている。しかし、繁殖期のオスでは隆起が著しく不明瞭になり、皮膚が著しく平滑になる。
- 成体の体長はオスで 43～161（平均 121）mm、メスで 53～162（平均 126）mm で、メスはオスよりもやや大型。
- 成体のオスは、早春に「クックック」と鳴く。
- 西日本にすむニホンヒキガエルと形態は非常に似ているが、鼓膜は大型で長径が眼からの距離の 2 倍以上であることが多い。
- ウシガエルも成体で 115～180mm ほどになり大きいですが、体色が緑色の地色である点と背中が滑らかである点で区別できる。
- オタマジャクシは成長しても全長 30mm ほどと小さく、体は黒一色で斑紋をもたない。
- 名古屋では通常 3 月中旬頃に、溝、湿地、池、湿原などの通常 30 cm 以下の浅い止水に 1,500～8,000 個の卵を含む長い寒天質の紐状卵塊を産む。
- 名古屋では 5 月ごろに集団で上陸し、上陸した子ガエルは 8mm ほどしかない。

■見られる場所と時間帯

- 名古屋では、主に東部の丘陵地に生息。平野部の丘陵地や畑、公園や庭先などでも見られる。
- 活動は日没と共に開始され、日の出前で終わる。
- 名古屋では通常 3 月中旬頃に、水辺に多数の個体が集まり、産卵する。

■その他

- 近年、急激に個体数の減少がみられ、産卵が見られなくなった丘陵地が数箇所存在する。
- 名古屋で個体数が激減した理由は不明。
- レッドデータブックなごや 2015 で絶滅危惧種Ⅱ類に選定されている。
- 眼の後ろに白い毒液（ブフォトキシン）を出す耳腺がある。

ニホンアマガエル（アマガエル科アマガエル属）



（撮影：藤谷武史）

■見分け方

- 体長は 2～5 cm と小さい。
- 体の色は緑色や灰色。
- 周囲の環境に合わせて体色を変化させるのが得意で、灰色や茶色に変化したときには背中に雲形模様が現れる。
- 同所的にすむシュレーゲルアオガエルに似るが、鼻先から眼を通り鼓膜の後ろまで、黒い線があることで区別できる。
- 指の吸盤で、草木や壁を登る。
- オスは「クワツ、クワツ、クワツ」と鳴く。

■見られる場所と時間帯

- 上陸した個体は、水田近くの草むらで暮らし、日中は集団で草むらの葉の上で日光浴する姿をみかけることもある。
- 繁殖期は普通 4～7 月で、水田、池、水溜まりなど、浅い止水に 250～800 個の卵を少数ずつ卵塊として産む。
- 日中も鳴いているが、初夏の夜の水田などでは他種のカエルと大合唱となる。
- 繁殖の最盛期には田んぼの畦の上に並び、競い合って鳴く姿が見られる。
- 土の中の浅い場所や朽木下などで冬眠する。

■その他

- 皮膚から出る粘液には毒があるため、触った後は手を洗うことを心がけよう。
- 繁殖期以外にも気圧の変化に反応し、低気圧が近づくと興奮して鳴く。これが俗にいう雨鳴きで、名のいわれになっている。

ウシガエル（アカガエル科アメリカアカガエル属：食用ガエル）



（撮影：鳥居亮一）

■見分け方

- ウシガエルの成体は、ヴォオー、ヴォオーと低い声で鳴く。
- 成体の体色は緑色の地色に茶褐色や暗褐色の虎班模様が入るものが多い。
- 眼の後ろにある円形のは鼓膜で、眼と同じかそれ以上の大きさがある。
- 成体は115～180mmほどに達し、国内にすむカエルでは最大である。
- アズマヒキガエルも成体で43～162mmほどの大きさになるが、背中が茶褐色、黄土色、赤褐色などの色であることと、さまざまな大きさの隆起でおおわれている点で区別できる。
- オタマジャクシは背面に明色と暗色の細点が散らばる。
- 名古屋で確認できるカエルの中で、ウシガエルについて大きなオタマジャクシは、トノサマガエルの全長70mm。そのため、オタマジャクシの全長が90mm以上のサイズであればほぼウシガエルと考えて良い。
- 繁殖は5～9月とだらだら続き、水面に浮くシート状に広がる卵（4,000～60,000個）を産みます。

■見られる場所と時間帯

- 平地の池や沼、湿地、水田等の水辺で見られる。特にヨシやガマなどが茂った場所を好む。
- 陸上よりも水中にいることが多く、コンクリート壁に囲まれた貯水池でもくらす。
- 成体は水中で越冬する。

■外来種としての問題点

- 大型で極めて捕食性が強く、昆虫やザリガニの他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類までも捕食し、共食いもする。口に入る大きさであれば、ほとんどの動物が餌となる。
- 環境省の特定外来生物に指定、環境省・農林水産省の重点対策外来種に選定されている。
- 世界の侵略的外来種ワースト100、日本の侵略的外来種ワースト100

■その他

- 食用ガエルとも呼ばれ、1918年に食用、養殖用としてアメリカ合衆国から持ち込まれた。
- オスは鼓膜が大きく、メスを呼ぶためにのど元の鳴のうを膨らせて鳴き、騒音公害にもなっている。

■引用文献

- 奥山風太郎・松橋利光. 2015. 山溪ハンディー図鑑9 増補改訂日本のカエル+サンショウオ類. 山と溪谷社.
- 藤谷武史. 2015. アズマヒキガエル. 名古屋市. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2015—動物編一, p.134. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課
環境省ウェブサイト
<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list/L-ryo-04.html>
- 前田憲男・上田秀雄. 2010. 声が聞こえる！カエルハンドブック. 文一総合出版.
- 前田憲男・松井正文. 1999. 改訂版 日本カエル図鑑. 文一総合出版.
- 松井正文・関慎太郎. 2016. ネイチャーウォッチングガイドブック分類と生活史～全種の生態、卵、オタマジャクシ 日本のカエル. 誠文堂新光社
- 関慎太郎・松井正文. 2016. 野外観察のための 日本産両生類図鑑. 緑書房
- 千羽晋示. 1978. ヒキガエルの生態学的研究 (IV) 発信器着装による行動軌跡. 自然教育園報告, 8:121-134

文責：寺本匡寛